

序論)

前回まで読んでいた 15 章では、パウロが、私たちの信仰の最も大切な土台である『キリストの復活』『死者のよみがえり』について、壮大なスケールで語っていました。そこにはキリストが死を打ち破ってよみがえられたこと、そして、キリストを信じる私たちにも、決して滅びることのない永遠の命と復活の希望が約束されており、やがては死に勝利して栄光のからだを与えられるという素晴らしいメッセージが書かれていました。

そしてパウロは、その輝かしい希望の結論として、15 章の最後で語ったことばがこのことばとなります。

15:58 ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。

復活の希望、絶対的な勝利を約束された私たちが、なすべきことは、『主のわざに励む』ということです。では、その『主のわざに励む』とは、具体的には、どのようなことなのでしょう。復活の希望に生きる者は、今日という現実の中でどのように生きるべきなのか。

この手紙のクライマックスである 16 章の始めの 4 節の部分から教えられていきたいと思います。

1) 献金遂行の命令

16:1 さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたとおりに、あなたがたも行いなさい。

ここでパウロが命じている献金というのは教会を運営し維持するための献金ではなく、貧困によって苦しみの中にあるエルサレム教会の信徒たちを支えるための献金です。

なぜエルサレム教会の人たちを支援しなければいけなかったかということ、大きく分けて 3 つあります。一つは、エルサレム教会の人々は激しい迫害と社会的孤立の中に置かれていたということ。二つ目は、深刻な飢饉の影響がまだ残っていたということ。そして三つ目は、エルサレム教会が持っていた共有財産が底をついてし

まっていたということです。

少し詳しく説明をします。最初のエルサレム教会が直面していた迫害と社会的孤立ですが、使徒の働き 7 章に書かれているステパノの殉教以降、エルサレムにいるクリスチャンたちは多くのユダヤ人たちから迫害を受けることになり、結果的に多くのクリスチャンはエルサレム以外の色々なところに離散することになりました。しかし、そんな中でも、エルサレムに残った人たちがいました。当然、彼らは継続的に、他のユダヤ教徒から、迫害を受け続けてきたわけです。しかも当時のエルサレムの経済というのはエルサレム神殿を中心に回っていましたから、ユダヤ教からは異端として扱われていたクリスチャンたちは、多くの職業から排除されていました。

また、紀元 41 年から 54 年の間にあった大飢饉は、それから数年経ったこのコリント人への手紙が書かれた時代にも影響を与えており、エルサレム教会の者たちは経済的回復をすることができない状況にいました。

そのような中で当時、初代教会の人たちは、財産を共有して貧しい人たちにも必要なお金が届くようにしていたんですけども、エルサレムではクリスチャンたちが仕事に就くのも難しい状態だったわけですから、当然その教会の共有財産も底をついてしまうような、そういう状況にあったのです。

だからこそ、エルサレム教会から「福音」という大きな恵みを受けた異邦人教会の人々が、エルサレム教会を支援するために献金を募る必要があったのです。

パウロはローマの教会の人たちにあてた手紙の中でこのように言っています。

15:25 しかし今は、聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます。

15:26 それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。

15:27 彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。

「異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです」パウロにとってこの献金はただの人道支援ではありませんでした。これはエルサレム教会から分け与えられた福音という恵みに対する応答であり、異邦人、ユダヤ人という隔ての壁を超えた大きな教会としての愛の業、そのものだったのです。

ですから私たちも、自分の教会を維持するための献金を捧げていくということも

大切なんですけども、地域の教会の枠を超えて、助けが必要な兄弟姉妹を支えるための献金をしていくということも、【主】の業に励むという意味でとても大切なことなのです。

具体的には私たちの教団では国内宣教献金とか、国外宣教献金とか、謝恩デーの献金などの自分の教会の外にいる兄弟姉妹を支える献金も、私たちがなすべき奉仕なのです。

ただし、この献金は強制的なもの、税金のようなものとは違います。(1節表示)ここで献金と訳されている言葉は、ギリシャ語では「ロギア」といって、新約聖書ではここしか出てこない言葉なのですが、当時のパピルスとかを調べてみると、この言葉は神様のために捧げる寄付金や、信仰に基づいて自発的に捧げる拠出金といった意味を持つことばで、決して強制徴収されるお金ではありませんでした。

でもパウロは経済的に危機的な状況にあるエルサレム教会の者たちを助けるためにコリント教会だけじゃなくてガラテヤの教会とか、ローマの教会とかいろいろな教会にこの献金を呼びかけていったのでした。

実際、ここでこの献金のことをパウロが言っているのは、コリントから遠く800kmほど離れたガラテヤの諸教会において、エルサレム教会を支える献金が集められているという話を、コリント教会の人たちが聞いて、パウロに対してこの献金についての質問を送ったからだと思います。まさに世界規模でエルサレム教会を支える献金プロジェクトが動いていたのです。

2) 献金の仕方

そしてパウロはこの献金をどのように集めたらよいかを2節で説明しています。

16:2 私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきおきなさい。

ここには献金の基本が4つ書かれています。

① すべてのキリスト者がそれぞれの責任において

一つは「あなたがたはそれぞれ」・・・つまり、献金は、すべてのキリスト者が、各々の判断と責任によって捧げるものである。ということです。

もうすでに見てきたように、コリント教会にはいろんな人がいました。貧しい人もいれば裕福な人もいる。奴隷の立場の人もいれば、自由人の立場の人もいる。そ

のような状況の中で、すべての人がそれぞれの立場において捧げなさいと勧められています。後で確認しますが、それは少額であってもよいのです。たとえわずかな捧げ物しかできなかったとしても、【主】にある兄弟姉妹として、この働きをそれぞれが担っていきましょうと勧められています。

② 継続的に礼拝の一環として

次に「いつも週の初めの日に」・・・つまり、継続的に礼拝の一環としてこの献金をしましょう。と勧められています。これはですね、その場だけの思いつきによって献金をするのではなくて、継続的な献身の現れとして、この献金を捧げていくということです。

これも後から出てくることですが、実際、礼拝の中でこの献金が捧げられていったのか、それとも週ごとにそれぞれがこの献金を自分の家に蓄えていったのか、というのは、聖書学者の間でも、解釈が分かれるところです。

たとえ、日曜日に、教会にお金を持ってきてその場で捧げていなかったとしても、この主の復活を覚える週の初めの日、日曜日に、献金のためのお金を取り分けるということは、「これは兄弟姉妹を支えるお金であるとともに、神様に捧げるものなのだ」という意識を自然と持つことになったと思います。

皆さん、ですから私たちが献金として捧げるそのお金は、たとえどのように用いられたとしても、主に対して捧げるものなのです。そして【主】への捧げ物は一過性のものでなく、継続的に捧げていくものです。

③ 収入に応じて

そして献金の基本の3つ目は「収入に応じて」です。他の新興宗教では借金をさせて献金をさせたりとか、無理な献金をさせたりとか、そういうことがニュースになったりしましたけども。聖書が教える献金の基本は違います。それぞれの収入に応じて捧げるものです。この「収入に応じて」ということばも、元のギリシャ語を直訳すると「(神様によって)豊かにさせられたかに応じて」となり、ただその人がどれだけ儲けたかによってというよりは、「神様によってどれほど豊かにさせられたか。」に応じてささげなさいというのです。この「させられた」という受け身になっているところがポイントですね。パウロは、神様から与えられた恵みの大きさに応じて、それを献金として献げなさい。といているのです。

だから、献金はなにもないところから絞り出すものではなくって、神様の恵みが先あって、その応答として、与えられた豊かさに応じて献げていくものなのです。

④ 計画的に備えておく

そして献金の基本の4つ目は、計画的に備えておくことです。(2節表示)

パウロは2節の最初に「私がそちらに行ってから献金を集めることがないように」といい、最後に「いくらかでも手もとに蓄えておきなさい」と述べています。つまりですね、献金の時になって、その場で慌てて取り繕うように捧げるのではなくて、その捧げるタイミングが来た時には、感謝をもって静かに捧げることができるように前もって、「蓄え、備え、準備しておきなさい」と言っているのです。

ここで「いくらかでも手もとに蓄えておきなさい」と書かれているので、これは「教会の礼拝の場で捧げるんじゃないでなくて、自分のところにこの支援献金用にお金を貯めて置くことをパウロは指示しているのではないですか。」とそういう意見もあると思います。それも解釈の一つとしてあります。ただ、この箇所最初に「私が行ってから(その場で)献金を集めることがないように」と言っているので、「教会であらかじめ集めて、蓄えておいて、それをエルサレムに移動するときに、スムーズに運べるようにしておきなさい」と、そうパウロが言っているのだらうというのが今の主流の解釈です。

どちらにしても献金は余り物でも残り物でもなく、その場の思いつきで捧げるものでもなく、あらかじめ主の前に聖別して取っておいて、計画的に捧げるものであることがわかります。

皆さん、私たちはこのように献金を捧げているでしょうか。

私は以前、「よくわかんない説教を聞いた時には、あんまり献金を捧げる気持ちにならないけども、わかりやすくて感動して恵まれる説教を聞いたときには喜んで献金も捧げる気持ちになります。」と言われたことがあります。

でも、皆さん、献金は説教に対する感動の多い少ないで、決めるものではありません。

それぞれの収入に応じて、計画的に聖別してとっておき、継続的に【主】への礼拝の一環として、それぞれの判断と責任の中で献げていく。

それが聖書的な献金なのです。

3) 献金の送金の仕方

そしてパウロは3節と4節でこの献金の送金方法を指定しています。

16:3 私がそちらに着いたら、あなたがたの承認を得た人たちに手紙を持たせてエルサレムに派遣し、あなたがたの贈り物を届けさせましょう。

16:4 もし私も行くほうがよければ、その人たちは私と一緒に行くことになるでしょう。

(3節表示) お金を預けて金利をもらえるといった銀行のような仕組みは、当時も存在してはいましたが、現代の銀行のように自動的にお金を送金するシステムはありませんでした。ですから、集められた献金をエルサレム教会に送る方法も、パウロ個人の裁量によってするのではなくて教会から承認を得た人たちがそのお金を預かって、そしてパウロの推薦状を持たせて、「これは間違いなく同じ信仰を持っている兄弟姉妹であり、この人たちは信用ができる人たちである」ということが分かるようにして、お金を預かった人たちを送り出そうとパウロはしたのです。

ここにはパウロの献金に対する誠実さと透明性が現れています。

それと同時に、これはパウロ個人の働きではなく、あくまでも教会の働きなのだ。ということが強調されていることがわかります。

だから、私たちが献金の使い方や送金については、個人に対する信頼によって成り立たせるのではなく、教会としての責任の中で献金を扱っていくのが大切なんだと思います。

その意味で、先日の教会総会でおこなったように、教会の決算報告、監査の報告がなされ、それを教会として承認していくという手順を踏むことはとっても大切なことだと思います。

結論)

皆さん、今日見てきた箇所は、一見すると非常に事務的で現実的な「お金の管理」の話に見えるかもしれませんが、しかし、パウロがなぜ「復活」という壮大なメッセージの直後にこの話を持ってきたのか、その意図をしっかりと心に留めましょう。

復活の主を信じ、永遠の命の希望に生きる私たちは、もはや自分の持っているものを自分のためだけに握りしめる必要がなくなった者です。「死」という最大の恐怖に勝利したからこそ、私たちは地上の物質的な執着からも解放され、自由に、喜んで隣

人のために仕えることができるのです。

今日の箇所で、パウロが示した献金の原則は、「それぞれが」「礼拝の一環として継続的に」「神の恵みに応じて」「計画的に前もって聖別して」捧げることです。これは、私たちの信仰が単なる頭の中の理解ではなく、日常の具体的な「神様への応答」と「愛の業」であることを示しています。

私たちの捧げる献金は、単なる教会の維持費ではありません。それは、国境や立場の違いを超えて、キリストの体である兄弟姉妹を支え、神の愛を目に見える形であらわす「主のわざ」そのものです。

私たちが今週、週の初めの日を迎え、神様から与えられた恵みを数え、その一部を聖別して備えるとき、そこには復活の主が共におられます。

復活の希望が与えられている私たちにとって「自分の労苦が主にあって無駄でない」ことを確信し、みなさんがそれぞれの判断の中で備えられた献金を【主】にささげながら、【主】のわざに励むものとなっていきましょう。